

中 世

源頼朝による鎌倉幕府開創以降、徳川家康によって江戸幕府開設までのおよそ400年間を、歴史上中世と呼びあらわしている。この時代は、武士の台頭にはじまり、武士による政権の確立、やがて応仁の乱を契機とする争乱の時期を迎え、群雄割拠華やかなりし時代であった。

北巨摩地方から甲府盆地一帯に渡っては、清和源氏の一統源義清、清光父子が平安時代末ごろ根をおろして勢力を拡大し、やがて甲斐一円を支配する武田氏へと系譜を続けていった。

一方、都留市内では、坂東八平氏のひとつ秩父氏の流れをくむ小山田氏が中津森（中津森館焼失後谷村に居館を移す）に居館を構えて勢力を郡内地方に伸じていった。この小山田氏がいつ頃同地域に移ったのか、また、どのような過程を経て勢力を拡大していったのかは、さだかではないが、小山田氏の滅亡は同時に歴史的意味あいでも都留市地域の中世の終焉となっている。

西暦	年号	事	項
1192	建久 3	源頼朝、鎌倉に幕府を開く。武家政治始まる。	
1202	建仁 2	大幡山広教寺(大幡)、源頼家の命により創建されたという。	
1213	建保 元	和田義盛の乱起る。古郡左衛門尉保忠は波加利荘(大月市初狩町)の東競石にて自殺する。	
1221	承久 3	承久の乱に鎌倉幕府より京都に送った東山道大將軍武田信光の旗下に甲州の武将として小山田太郎の名がみえる。	
1333	元弘 3	鎌倉幕府亡ぶ。	
1334	建武 元	建武中興なる。	
1335	建武 2	護良親王、足利直義のため鎌倉の士卒で殺される。	
1346	貞和 2 正平 元	金ごう山宝鏡寺創建。(夏狩)	
1390	明德 元	大幡山広教寺本尊地藏菩薩坐像開眼。	
1390	明德年間	富春山桂林寺創建。(金井)	
1394			
1417	応永 2 4	上杉禪秀の乱起る。上杉方に味方した武田信満(正妻は小山田富春(弥二郎)の女)は敗れて大和村土賊山にて自殺する。	
1469	文明年間	向富山用津院創建。(金井)	
1480			
1492	明応 元	甲州乱国になり始まる。都留郡大飢饉。	
1495	明応 4	伊豆の北条早雲都留郡に侵入、鎌山(富士吉田市)に布陣。和談なり退く。	
1499	明応 8	小山田信長は甲州一国の和談成立により、都留郡田原郷にある向嶽庵を旧規に復し安堵する。	
1501	文亀 元	北条早雲、吉田の城山、小倉山に築城。甲州勢は迎え打つ。北条軍敗退する。	
1508	永正 5	信虎と国中にて合戦、小山田弥太郎打死、小山田平三韭山に御出仕。	
1509	永正 6	信虎、都留郡に侵入。河口宿を焼く。下の検断、吉田の要	

西暦	年号	事	項
			書記も討たれる。
1510	永正 7	国中(武田)と都留郡(小山田)の和睦が成立する。	
1511	永正 8	大儀山長生寺創建(羽根子)、同寺寺記には向富山用津院と同年代とある。	
1518	永正 15	駿河の今川氏と都留郡小山田氏と和睦成立。	
1524	大永 4	信虎兵1万8千を率いて猿橋に出陣し、関東管領上杉憲房と対峙、猿橋で度々合戦する。	
1527	大永 7	小山田越中守信有、中津森に百坪の館を建てる。	
1530	享祿 3	小山田中津森館焼ける。小山田越中守信有と北条氏綱と八坪坂で合戦、小山田方敗れ吉田衆打死。	
		竹が鼻に円通庵(後の大慈山円通院)を創建。	
1532	天文 元	小山田越中守信有室死去。信有一族郎党と谷村に新屋敷(館)を建てて移る。	
1533	天文 2	小山田氏は古府中に70坪の家敷つくる。猿橋・吉田・谷村焼ける。	
1535	天文 4	都留郡山中で武田軍と北条・今川連合軍が合戦、武田方大敗、都留郡の小山田禅正など多数打死。勝沼方も打死する者が多かった。	
1541	天文 10	小山田越中守信有死去、その子出羽守信有家督を継ぐ。	
1550	天文 19	小山田出羽守信有、都留郡初狩宿役人に塩山より四日市場にいたる人馬の通過を許すよう命ずる。	
1552	天文 21	小山田出羽守信有死去、葬儀参列者一万人という。	
1559	永祿 2	小山田信茂、悪銭に属する新銭横行に対し、富士吉田御師に対し講者が法理に背いて新銭を持ち込まぬよう厳命する。	
1567	永祿 10	小山田信茂、祖父越中守・父出羽守の先例に従い、吉田西念者門前の諸役を免許する。	
1572	元亀 3	小山田信茂、先に甲相の和親が実現したので、富士道者に懇切を尽すよう御師衆に布告する。	
1573	天正 元	小山田信茂、谷村長生寺に祖先以来寄進の寺領都合 41 貫 675 文の書立を与える。	
1582	天正 10	武田勝頼、妻子と共に天目山にて自刃し武田氏亡ぶ。小山田	

西暦	年号	事項
1590	天正18	信茂、甲府善光寺において妻子と共に織田氏のため殺される。 <ul style="list-style-type: none"> 徳川家康家臣、鳥居元忠都留郡1万8千石の領主となる。 鳥居元忠総州矢作4万石の領主として転封。
1591	天正19	羽柴秀勝家臣、三輪五右衛門近家都留郡領主として在城。 <ul style="list-style-type: none"> 近家美濃国の岐阜に移り、加藤遠江守光泰家臣加藤佐内が都留郡領主として在城。
1593	文禄2	佐内美野国黒野に移り、浅野長政家臣浅野氏重が都留郡領主として在城。氏重は慶長6年紀州木ノ本に移る。

都留郡小山田氏

小山田氏は関東八平氏の一つ、秩父氏の分れで、秩父荘司重弘の子有重が武蔵多摩郡小山田庄に拠って小山田氏を称したのに始まる。承久の乱に武田信光の配下に小山田太郎の名がみえるので、鎌倉時代にその一族がすでに甲斐に移っていたことが知られる。

「甲斐国志」によると、都留郡小山田氏の祖は武州小山田別当有重の子、小山田五郎行平（行重）としているが、文献上では明らかでない。

小山田富春（弥二郎と思われる） 延徳年間（1390～94）

都留郡小山田氏が文献上明らかになるのは、明徳年間（1390～94）都留郡金井（当時中津森）の桂林山富春寺（始め曹洞宗、現臨済宗）の開基小山田富春のときからである。

『鎌倉大草紙』に「小山田弥二郎の女が武田信満に嫁す」とある。小山田富春が弥二郎と考えられるので、富春の女が信満に嫁ぎ14代武田信重を産んだことになる。

応永23年（1416）前執事の上杉禅秀（氏憲）が関東管領（鎌倉府）足利持氏に不満をもち乱を起した。甲斐・安芸両国の守護であった武田信春の子信満が、小舅にあたる上杉禅秀に味方して敗れて甲斐に逃げ帰り、都留郡で防戦したが木賊山（東山梨郡大和村）に入って自害した。墓は天目山栖雲寺にある。

小山田信実

桂林山富春寺の金山観音（郡内観音霊場30番札所）は、如意輪腹籠り1寸7分、平弥三郎信実が守本尊として懐中にしていた霊仏で、城廊より出現したといわれている。

小山田信光

明治19年富春山桂林寺より本山に提出した書類の中に本尊薬師如来（或いは釈伽如来）の台座に「小山田信光」の名が刻んであったといわれている。

小山田信長（耕雲と思われる）

『甲斐国志』に向富山用津院（金井）の開基は小山田耕雲とあるが、年代的に考えて耕雲は信長と思われる。

『妙法寺記』の延徳4年（1492）に「此年6月11日、甲州乱国ニ成始ル也」とある。小山田信長の妹が16代武田信昌に嫁いで油川信恵を産んだといわれている。のちに17代となった武田信縄と、弟の油川信恵との家督争いに、小山田信長と同弥太郎（信長の子と考えられる）は、血族の信恵側について、信縄と、その子信虎（18代）と争うことになった。「乱国ニ成始ル也」はこの争いを意味している。この争いも明応7年（1498）に和解が成立した。

小山田弥太郎（義山と思われる）

永正4年（1507）武田信縄が死去し、14歳の信虎が武田の家督を相続したが、叔父の信恵父子は、都留郡の小山田弥太郎をはじめ、国中の味方する者と幼主に反旗をひるがえして信虎と合戦したが、信恵親子、小山田弥太郎は討死し、小山田平三（のちの越中守信有と思われる）は韭山の北条早雲のもとへ逃れた。

小山田越中守信有（号契山）

永正7年国中と都留郡との争いも和睦が成立し、信虎の妹が小山田越中守信有に嫁した。

永正17年（1520）岩殿七社権現の棟札に「都留郡守護平信有」とある。

大永7年（1527）「中津森ノ殿様（越中守信有）百坪ニ御家造り玉フ」

享禄3年（1530）3月中津森の館が炎上。

享禄5年（1532）谷村へ居館を建て一族郎党と移る。

天文10年2月14日死去、号契山（長生寺殿羽州大守契山存心大禅定門）

小山田出羽守信有（越中守信有の子）天文10年（1541）～天文21年（1552）

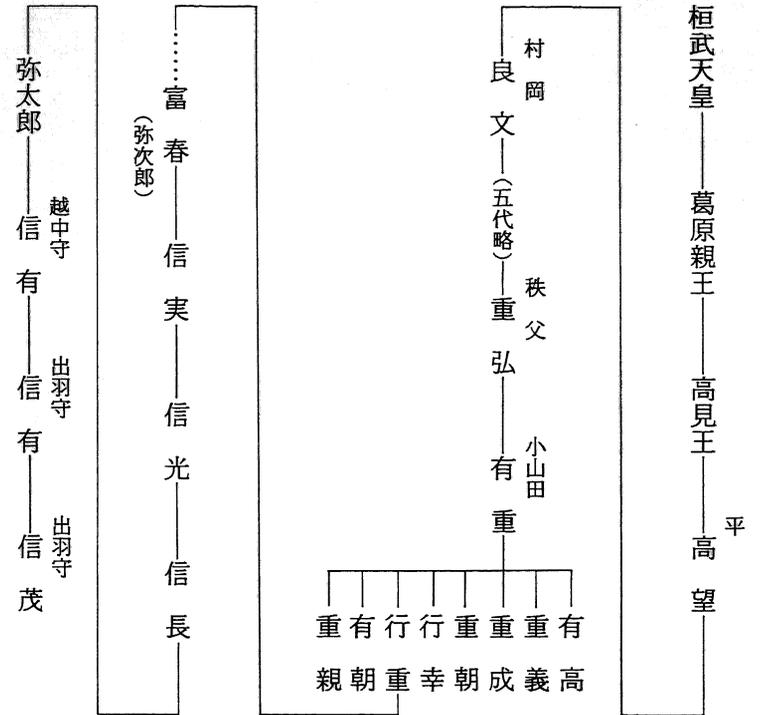
『妙法寺記』に「天文21年正月23日、出羽守信有死去、葬式御共衆1万人」とある。号桃隠、常膳院桃隠宗源大禅定門。

小山田出羽守信茂（出羽守信有の子）天文21年（1552）～天正10年（1582）

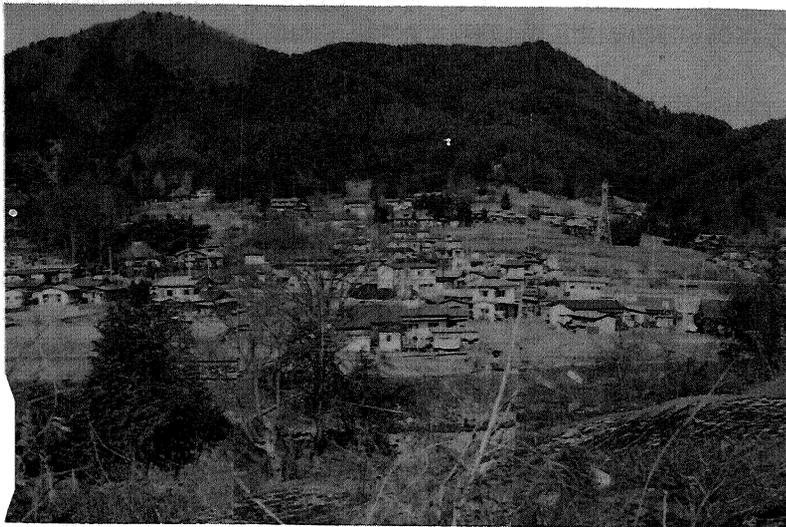
天正10年3月11日 武田勝頼天目山で自害。

天正10年3月24日 信茂妻子、母と共に織田氏のために甲府善光寺で殺される。号武山。靈正院逸嶺現存定門。

小山田氏は武田氏に対し、親族衆の巨頭として都留郡守護の自覚のもとに郡内の支配権を維持し、武田の全盛時代の信玄の政治力をもってしても完全には直領化しえず、二重の支配構造を許す間接支配地域として存置せざるを得なかった。武田の滅亡時に、勝頼の支配から離脱したのも、かねてから領国支配の意識を強くいただいていたからである。



小山田氏系図



小山田氏中津森館址

『勝山記』に「大永7年（1527）中津森の殿様百坪ニ御家造り玉フ」とあり、『甲斐国志』には、「小山田氏旧址ハ用津禪院ノ東ニ在リ、里人ハ今モ御屋敷ト呼ブ、外郭ノ溝涯処々ニ残り存シタルヲ土居堀ト字ナセリ」とある。現地調査の結果では、用津院と桂林寺の間の台地に建てられていたと考えられる。

享禄3年（1530）3月中津森の館が炎上したため、政治、経済、軍事的な面を考慮して、天文元年（1532）谷村に新居館を建てて移った。館の位置は、明確な文献が残されていないが、小山田氏以後の歴代城主の居城からして、現在の谷村第一小学校の位置であったことが推察される。また、長安寺の場所が小山田氏の別荘だったといわれている。

『甲斐国志』に「岩殿山は要害城ニシテ居館ハ谷村タルコト明ナリ」とある。しかし、越中守信有が谷村に居館を移した時代から、桂川を隔てた勝山城を要害城としていたことが、最近の調査で明らかになってきた。

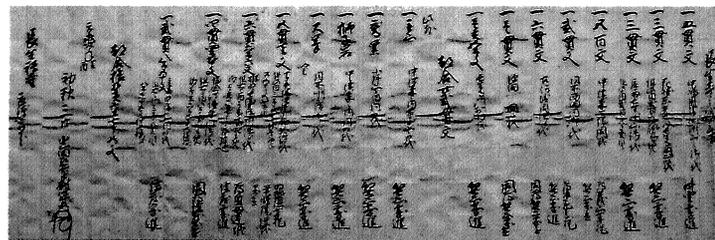
小山田越中守信有画像

『長生寺文書』に「契山存心像一幅信茂納之」とある。文政10年（1827）5月、水府侍臣裔孫小山田勝益が画像を修復した後、現在に至っている。

昭和55年4月都留市文化財に指定されている。



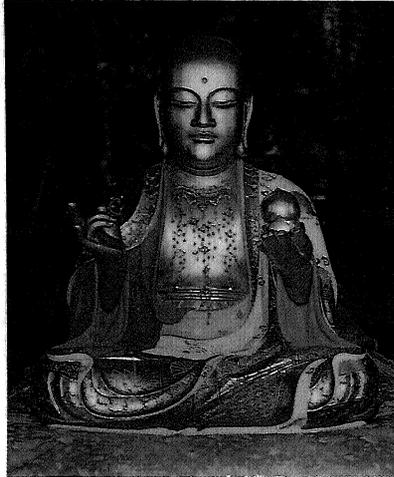
小山田越中守信有画像



小山田信茂寺領寄進状

小山田兵衛尉信茂長生寺領寄進文書

元龜4年（1573）7月3日、小山田信茂は、菩提寺大儀山長生寺に、自身を含めて祖先（耕雲、義山、涼苑、契山、桃隠）以来の寺領都合41貫675文の書立をあたえている。この文書は、都留郡小山田氏の系図を知るためにも大切な資料で、昭和54年4月都留市文化財に指定されている。



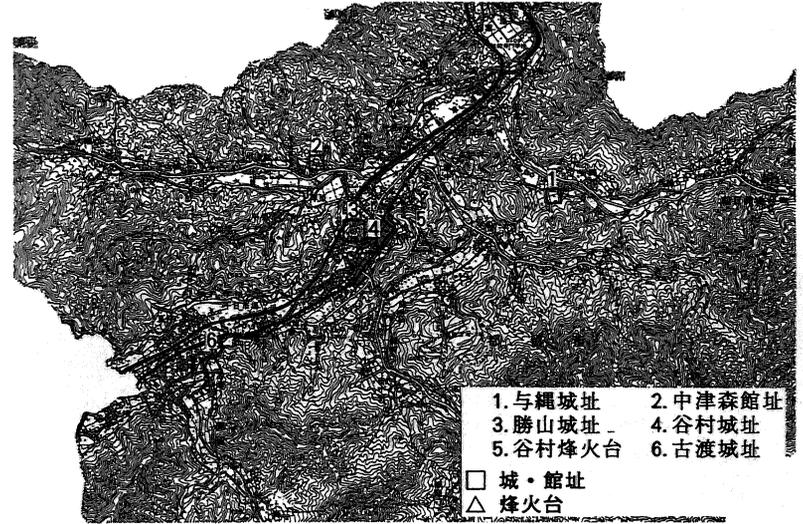
広教寺地藏菩薩座像

広教寺本尊地藏菩薩座像

本尊延命地藏菩薩は、木彫座像で、像長63センチメートル、座底に「明德元年（1590）6月16日、重吉在判歳23」と記されている。

また台座には「明德元年4月23日、法眼院嘗謹作」とあり、広教寺記には七条法眼とある。

年代が明記されているものでは、現在市内で一番古いもので、昭和52年6月都留市有形文化財に指定された。



都留郡小山田氏の館と城郭

- | | |
|----------|----------|
| 1. 与繩城址 | 2. 中津森館址 |
| 3. 勝山城址 | 4. 谷村城址 |
| 5. 谷村烽火台 | 6. 古渡城址 |

□ 城・館址
△ 烽火台

広教寺の鑿子(銅鉢)

広教寺の鑿子に、「元弘元辛未年（1331）8月上旬」と刻まれている。鑿子はお寺の勤行のとき打ち鳴らす金銅でつくった鉢型の仏具である。

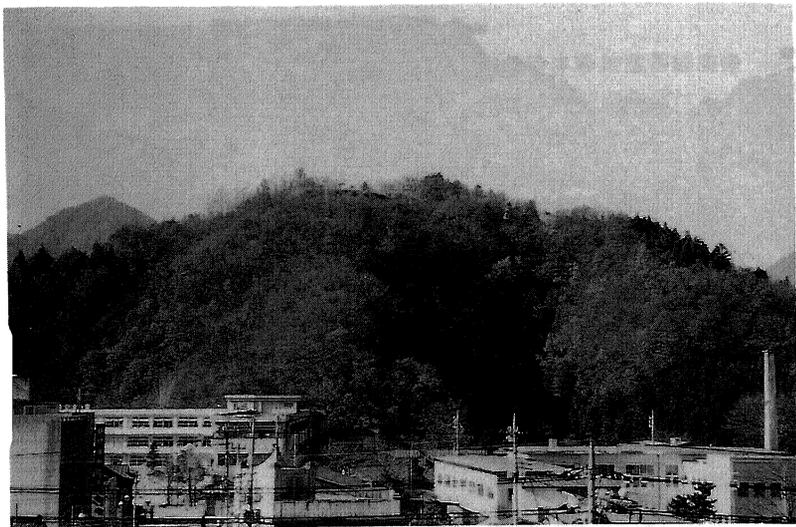
また広教寺には、寛文10年（1670）に出版された大般若経600巻があり、市の有形文化財に指定されている。



広教寺の鑿子

明德年間（1390～94）領主小山田富春が開基となり、中津森（現金井）に菩提寺として富春山桂林寺を建立しているのので、すでに小山田氏の館があったことが知られる。

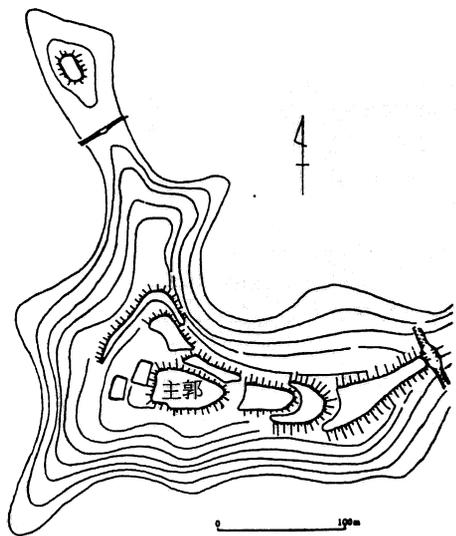
谷村に館を移した越中守信有は、城山（勝山城）を要害城とし、吉田口には一族の小山田禅正を境に配し、大月口には、その子出羽守信有を駒橋に配した。国中、秋山方面の間道警備には、大幡、与繩に兵を配して守備したことが推察される。また非常の場合に備えて、円通院の裏山、鹿留の古城山などの要所に烽火台（出城）が配置されて、火急の状況が谷村館に通報された。



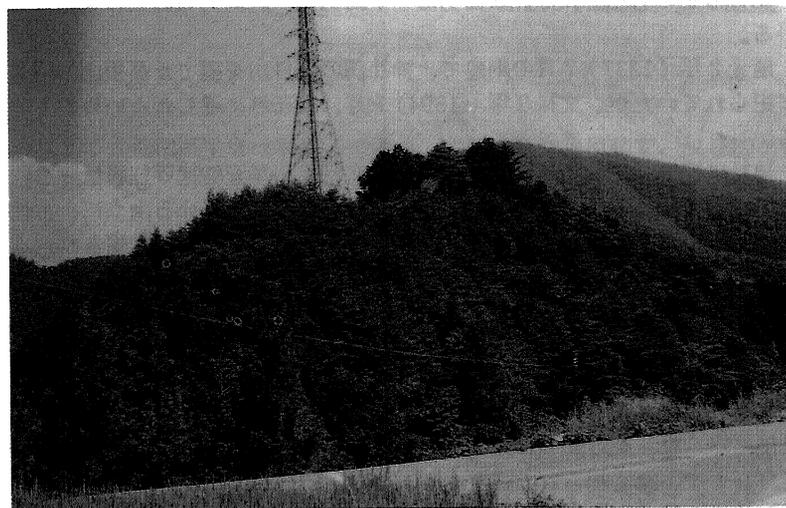
勝山城



与繩城址



谷村烽火台



古渡の古城山



石船神社社殿



護良親王御首級

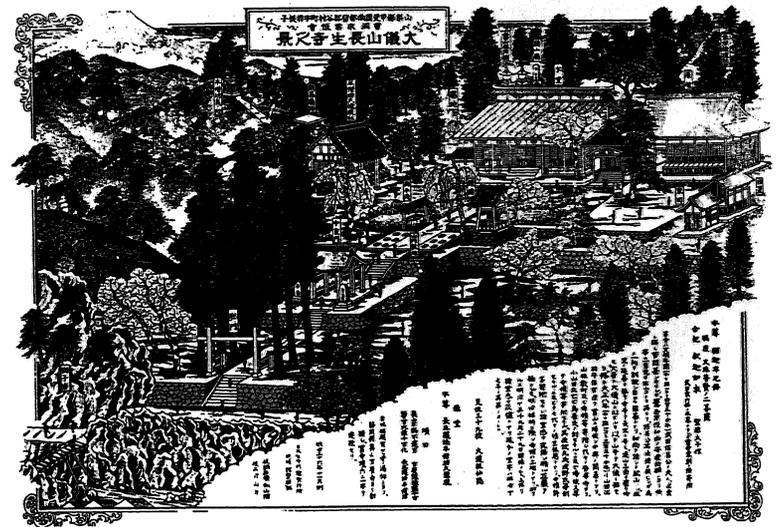
朝日馬場の石船神社は、表筒男命・中筒男命・底筒男命の三神を祀っている。

延元2年(1337)7月の創建で、神社前の朝日川を隔てた高根山の頂きに祀られていたが、文禄3年(1594)7月、現在地に遷したといわれている。

神社に続く「尾咲原遺跡」からは、縄文時代、平安時代の住居址・遺物が出土している。この地域は、「朝日」の地名が残っているように、古代から高根山を中心に日神(太陽)信仰が行われていたことが推察され、この日神信仰に石船神社が重なって祀られたことが考えられ、石船神社の起源は、遙か古代に溯ることができる。

後醍醐天皇の皇子護良親王は、建武の中興に功績をたてたが、その後足利尊氏の中傷で鎌倉の土牢に入れられ、建武2年(1335)7月、足利直義の家臣によって殺された。伝説によると、親王の御首級は側女の雛鶴姫と従臣に守られ、都留郡朝日村の石船神社に納められ、地元民の信仰となって今日まで手厚く祀られている。

御首級の復顔術は日本最古のもので、その技術が優れているため、昭和54年3月都留市の有形文化財に指定された。

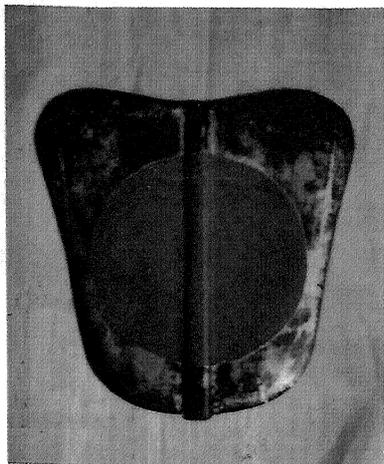


明治36年製版当時の長生寺

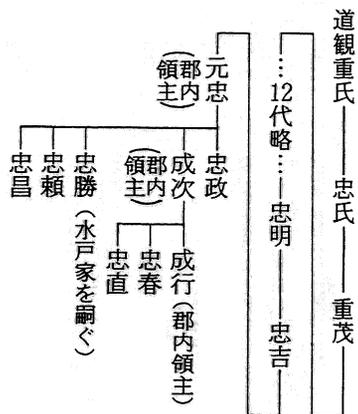
曹洞宗大儀山長生寺は羽根子にあり、本尊は釈迦牟尼仏で、現在29ヶ寺(始め41ヶ寺)の末寺があり、甲斐108霊場の札所でもある。永正8年(1511)小山田越中守信有が、鷹岳宗俊禅師(実は三世一道光円禅師)を講じて開山とし、自ら開基となって建立了。以後、小山田、鳥居、秋元の各歴代都留郡領主の菩提寺として保護され、寄進により寺領が安堵された。

寺宝として、十六善神の画像(狩野琢磨筆)、鳥居成次寄贈の竜虎梅竹画屏風(狩野元信筆)などがあり、また鳥居元忠(寺記では小山田信茂)の使用した軍配が保存されている。

江戸時代、甲斐の名僧祖晚禅師(金井出身)が、当時の客殿後方の小池に安置した弁財天女に対する「天真ノ辯才妙徳アリ、霊水沈々藍ニ接シテ青シ、一滴百千汲メド価無シ、人間何ゾ知ラン這中ノ妙」の謁は多くの人に知られている。



鳥居元忠所持の軍配団扇



鳥居氏系図

都留郡鳥居氏

鳥居元忠は徳川家譜代の臣で、鳥居忠吉の二男として生れたが、兄忠吉が討死して子がなかったので鳥居家を継いだ。

天正10年(1582)6月、織田信長が本能寺で討死後、甲斐国の領地争いで徳川・北条両氏が争うことになったが、天正10年の暮れ、元忠は戦功により都留郡1万8千石の領主となり、天正18年には、家康の関東入部に従って上総矢作4万石の領主となった。

慶長5年(1600)7月、元忠は家康が上杉討伐のとき、留守の伏見城を守備していたが、大阪方の石田三成の大軍に攻められ討死した。時に62歳であった。

その子成次は、慶長6年父の旧領を賜り谷村城主となったが、天和2年(1616)駿河大納言忠長郷(徳川家光の弟)の家老となり、3万5千石を領したが、寛永8年(1631)死去した。

成次の子成行は、寛永8年父の遺領を継いで家老となったが、寛永9年二代将軍徳川秀忠の死後、家光は忠長に狂暴の振舞いがあるとして、上州高崎に幽閉のうえ所領を没収した。忠長は同10年12月高崎で自刃し、成行も家老の責を負って所領没収となり、出羽最上に蟄居の身となった。



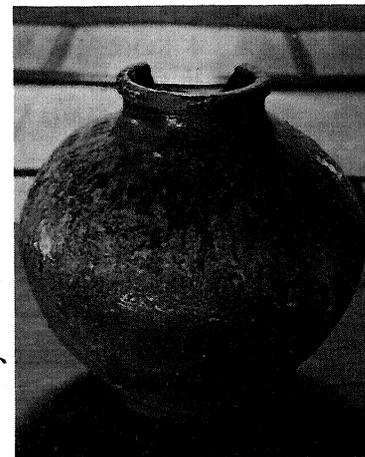
明治36年製版当時の長安寺

浄土宗禅定山長安寺

長安寺の本尊は阿弥陀如来で、境内の観音堂に祀る正観音は、郡内33観音めぐりの第2番札所である。小山田越中守信有が谷村に館を移したときの別荘の跡地と伝えられ、天正13年(1585)鳥居元忠が感貞大和尚(北条氏綱の男)を開山とし、自ら開基となって創建した寺である。

寺宝として、真向弥陀画像(詔問法眼筆)虎溪三笑図唐絵(狩野常耀筆)などのほか、徳川家康が天正17年9月、都留郡巡見のとき感貞大和尚に送った茶壺一口が保存されている。

長安寺本堂は享保10年(1725)に再建されたもので、昭和59年都留市有形文化財に指定された。



徳川家康から送られた茶壺



田野倉の三島神社

大松山三島神社

『甲斐国志』に、「相伝フ、大松山ニ古ヘ大木アリ、切りテ三段トナシ、三島明神ノ神像三軀ヲ作り云々」とある。

三体のうち、本木の像を田野倉の三島神社（先の宮）に、中段を大月市御太刀の三島神社（中の宮）に、末段を同市殿上の三島神社（下の宮）に祀り、大松山と称した。祭神は大山祇命で、事代主命を合祀している。

三島神社の創建については、『三島神社由緒』に、「創建は平安時代のはじめ、平城天皇の大同元年（806）で、勧請に関する事情は、延宝8年（1680）の火災で明らかでない」と記されている。

愛媛県越智郡大三島町に鎮座する三島大明神（祭神大山祇命）を勧請したもので、都留郡の場合、富士浅間神社と同様に、富士山の噴火、地震に対する沈静と安穩を祈願して建てられたものである。

田野倉の三島神社前から見た霊峰富士の姿は素晴らしく、古代から富士信者の選擇場所であったことが推察できる。

また、三島神社が田野倉、御太刀、殿上に祀られていることは、昔からこの三地域が三島明神信仰で結ばれていたことが考えられ、桂川右岸の猿橋一殿上一駒橋一田野倉一井倉一谷村一十日市場一暮地を結ぶ古代の道があったものと考えられる。